

論 文

ほんとうの宗教教育を求めて

——真宗教育論序説——

(本学元学長廣小路亨先生のことばを手がかりとして)

京都光華中学高等学校教諭・真宗文化研究所研究員

高 田 正 城

1. はじめに
2. 真宗教育者・廣小路亨先生の生涯(略年表)
3. 廣小路先生の教育観(真宗に依る教育)
4. 廣小路先生の親鸞像(教育観の根底にあるもの)
5. 宗教教育顕現の場としての「家庭教育」
6. 宗教教育の課題
7. おわりに——ほんとうの宗教教育を求めて——

1. はじめに

現代の教師のなかで、これほど人間への関心が強烈で、しかも、人間愛などというなまやさしい言葉であらわ

しきれないほどに人間へのかなしみを持ち、すこしの喜びを大きく感じ、それを感じられないときの自分を嫌悪し、そうした涙をひきずりながら、人間の林を縫い歩いている教師もまれであろう。

人間がいる。

廣小路氏は、それを撫でている。

いつのまにか、廣小路氏の手は、仏陀を撫でている。

いや撫でようとしている。

この本を読みながら、こういう先生にめぐまれなかった過去に、ふとむなしさを持った。⁽¹⁾

これは一九六三年（昭和三十八年）に上梓された、本学元学長廣小路亨師（当時は大谷中高校長）の最初の随想集『学窓余言』に作家、司馬遼太郎氏が寄せた「推薦の言葉」である。（後に帯封として添付された）

司馬氏は産経新聞京都支局の記者時代から、京都大学の桑原武夫氏、貝塚茂樹氏らをはじめ、関西の教育・宗教界での知己が多かったようだが、廣小路師との交友もこの時期からのものと思われる。

宗教紙『中外日報』に連載された『梟の城』によって一九六〇年（昭和三十五年）に直木賞を受賞した司馬氏は、当初伝奇時代小説の書き手と目されたが、丁度この頃から、代表作『竜馬がゆく』『国盗り物語』の執筆により、後の「国民的歴史小説家」への道を歩み始める。

短い文章ではあるが、廣小路師を知る者にとってはまさに師の本質を言い得ているようであり、さすがと思わせる。

「なんと立派な先生やろ……と思うたな。今まで多くの校長先生見てきたけど、こんな立派な校長先生に出会

ったことはなかったと思うた。」

これは一転して、(恐縮ながら)筆者の老母の回想からの言葉である。小学校の教員をしていた母は、当時(昭和五十年前後)一保護者として大谷高校を訪問した際に廣小路師の講話を聞き、深く感銘を受けたという。どのような講話の、どのような点に感心したのか問うと、

「くわしいお話はもう忘れてしまうけれど……なんというたらええんやろ、この先生だけは、ほんまのこと言うてはる。ほんまもんやという気がしたなあ……」

師は決して小手先の言辞を弄する人ではなかった。その存在そのものと誠実な表現で何事かを語る人であった。おそらく師の警咳に接した多くの人が、その人格から放射される教育者としての誠意を感得したのであろう。

廣小路亨先生とは、まさにそういう方であった。

筆者は、昭和五十六年本学園光華中学校教諭として採用され、以来三〇年間にわたり本学園の中等教育の場で「宗教教育」と向かい合ってきた(現・京都光華中学高等学校教諭)。

具体的には、まず中高の「宗教科」教科担当者として、また、校務の「宗教部」担当者として活動してきたが、種々の経緯があつて、ここ数年教科、校務共に「宗教」から距離を置くようになった。

現在の視点でこれまでの活動を振り返ってみると、いくつかの成果や達成感がある反面、数多くの反省点や問題点が浮かび上がってくる。

またそれは中高のみならず、本学園全体に関わる「宗教教育」への理解および実践上の問題点ととらえることも可能と思われる。

今年度創立七〇周年を迎えた本学園にとって「宗教教育」こそは、建学の精神と直接結びついた教育内容であり、これを明らかにせずして光華教育は成り立たないと言っても過言ではない。

今回の研究は、昭和五十四年から五十八年の間、本学の学長（昭和五十二年から五十六年は学園長、従って昭和五十四年から昭和五十六年までは両者を兼務）であられた、故廣小路亨先生の著書からのいくつかの言葉を手がかりとして「真宗に依る教育」の本来的意義を明らかにすると共に、本学園における「宗教教育」理解および実践上の問題点を再考し、（敢えて通俗的な表現をお許し願いたい）「ほんとうの宗教教育」実践への一材料となればと願うものである。

2. 真宗教育者・廣小路亨先生の生涯

紙数の都合もあり、今回は略年表によって先生の御生涯の足跡を簡単にご紹介するにとどめたい。（なお、年表は基本的には、福島和人師作成のものを流用させていただき、若干の手を加えた。）

【廣小路亨先生略年表】

明治四十一（一九〇八）年 愛知県碧海郡依佐美村高須坤八〇（現刈谷市）に父・正木卯三郎、母・てつの次男として出生。

大正 四（一九一五）年 依佐美村立第四尋常小学校入学。

大正 七（一九一八）年 母てつ逝去。

大正 十(一九二一)年 尾張中学校入学。

大正 十一(一九二二)年 弟・妹不慮の事故により逝去。

大正 十二(一九二三)年 得度し、大谷派僧侶となる。

大正 十四(一九二五)年 大谷大学予科入学。

昭和 三(一九二八)年 同終了後、大谷大学文学部仏教学科入学。

昭和 六(一九三一)年 同卒業後、大谷大学研究科入学。

昭和 七(一九三二)年 真宗大谷派開法寺(京都府大山崎町)に入寺。廣小路と改姓(妻・かつら)。

昭和 八(一九三三)年 恩師山田文昭元大谷大学教授示寂。

昭和 九(一九三四)年 大谷専修学院教授兼大谷中学校教諭に就任。大谷派学階擬講を受ける。長女孝子誕生。

昭和 十二(一九三七)年 長女孝子逝去。次女とき子誕生。

昭和 十七(一九四二)年 大谷専修学院主事兼教導就任。

昭和 二十(一九四五)年 末弟、長崎の原爆で逝去。

昭和 二十一(一九四六)年 大谷専修学院院长就任。

昭和 二十二(一九四七)年 大谷中学(旧制)校長就任。

昭和 二十三(一九四八)年 大谷高校兼大谷中学校校長。

(昭和五十二(一九七七)年 学校法人大谷学園理事・評議員。

京都府人権擁護委員。

大谷派同和委員。

京都府大山崎町教育委員。

京都府高等学校野球連盟会長。

大谷幼稚園園長。

日本私立中学高等学校連合会常任理事。

大谷派関係学校連合会会長。

京都府大山崎町教育委員長。

(右記を歴任)

大谷派学階嗣講を受ける。

昭和三十二(一九五七)年 父・卯三郎逝去。

昭和五十二(一九七七)年 学校法人光華女子学園学園長に就任。

昭和五十四(一九七九)年 光華女子大学兼光華女子短期大学学長に就任。

昭和五十五(一九八〇)年 京都府教育委員に就任。

昭和六十三(一九八八)年 十一月二十二日示寂。

法名暁了院釈大道。

以下に紹介するのは、廣小路師の生涯をある意味で決定付けたかと思える、父親との挿話である。

実は、私の母は私の小さいときに亡くなりました。そして小学校四年生のときに、父親から、「おまえは坊さんになれ」と言われたのです。在家の者が坊さんになれと言われて、それほどいい気はしませんでした。いやだ

なあと思いました。しかしそのとき、父親の言った言葉は今でも忘れることができません。「おまえのお母さんは五人の子どもを生んで苦労したんだ。それで死んでしまった。かわいそうだ。だから五人の子どものなかでせめて一人だけでも、お母さんのことを生涯忘れずに生きていってくれる者が欲しいんだ。おまえは次男だから坊さんになってくれんか。父親である私のことは忘れてくれていい」というのです。小学校四年の子どもをつかまえて、そういうことを言ったのは、やはりそれだけ若くして死んだ妻のことを不憫に思っていることでしょう。

そういう形で私は坊さんにならざるをえなかったのです。自分が選んだわけではなく、一方的に親から押しつけられた道です。それへの反発が、やがて中学へ入って出てきます。同級生が自分で決めた学校へ行こうとするときに、なぜ私だけが行けないのかという不満です。逃げ出してやろうとなんべんも思いました。しかしそのつど、心に襲いかかってくるものは、母親がみじめな死に方をしたということと、父親が「母親のことを忘れずに生きてくれ」といったその言葉です。それがひっかかってくると、自分が坊さんの世界から逃げ出すことは母親を捨てることだと思えて、逃げられなくなってしまうのです。どうしても逃げられないとわかったときに行きついたのは開き直りでした。

「坊さんとはなんだ」、「坊さんになった以上は坊さんらしい坊さんになるしかない。生涯かけて仏法を聞いていくんだ」ということです。これが私の大学を終わるときの気持ちだったと思います。そして今、振り返ってみますと、自分がこういう機縁を与えられたことによって仏法に遇いえたというよろこびは深いのです。このことがなければ、おそらく私は仏法には遇いえなかったのではないかという気がします。⁽²⁾

年表でも明らかなように、廣小路師は、母をはじめ、弟妹、長女など多くの肉親を病気や不慮の事故で早く亡くさされている。後述するが、その生涯はそういった悲しみを生涯抱き続けながら、それを有縁の人々への慈愛へと変えて

働きかけ続けた一生であった。

3. 廣小路先生の教育観―真宗に依る教育―

学校が生きている

学校が生きているということは、教育が成り立っていることでありますが、それは具体的には、そこに教える教師の皆がいきいきとして教えていることであり、そこに学んでいる生徒のすべてが澁刺として活気を呈していることであり、そして、そこに相互の信頼がみられることにほかならないと思います。⁽³⁾

「教員と生徒が共にいきいきと活動している。」

これは現在でも公立私立を問わず、「学校紹介」等によく用いられる表現である。確かにそれが実現すれば学校の有り様としては理想的な姿であろう。

しかし、ここで廣小路師はさりげなく「(学校が生きているということは)そこに(教師と生徒)相互の信頼がみられることにほかならない」と押さえておられる。

そして、そうした「生きている学校」実現のためには、何よりも教員側の活動が大切であることを、澤柳政太郎、谷内正順、デュボンといった先人の言葉を借りて指摘しておられる。

教育とは

新しく真宗大谷派の關係学校に御就任いただいた先生方へのお話であるから、私の尊敬している三人の先生方のお言葉をいただきながら思うて、少しの時間のべてみます。

その一人は、澤柳政太郎先生さわやま まさたろうです。先生の業績についてご存知の方が多くと思いますのでふれませんが、私どもの学校の三代目の校長もつとめられた人です。

先生が私立の成城小学校を創立なさるとき、「教育は教師なり」という持論から、全国に呼びかけて優秀な先生方を求められました。それに応じて京城から、はるばる上京し先生の宅を訪れた若い教師がいました。現在の玉川学園の小原国芳先生もその一人であったそうです。この若い教師を先生は応接室に通して、「今から十分間で、「教育とは何か」について書いてくれ」といわれた。この人は大変勉強家で、学生時代に学んだものをよく覚えていたので、すぐ答案を書き、まず満点であろう、と自信をもって提出した。ところが先生は一目見るなり、「こんなことは忘れたまえ、学校で習ったことなどは忘れていい、教育とは誠を行うことだ」と言われたそうです。若い教師には、それがよく解らない、それで「誠を行うとは、どういうことですか」とたずねた。すると、先生は「誠を行うというのは、誰とでも、いつでも、どこでも駈け引きをしないことだ」と答えられたという。これは素晴らしい言葉です。私は、この問答を御本人である当時の若い教師の回想講話で読んで、長い間の教師生活で、何んとなくすつきりしなかったものが拭い去られたような感動を持ったことでした。

（中略）

私たちは、教育の現場で生徒たちと接するのですが、つい自分は教師、相手は生徒とみて、力を抜いたり、甚だしいときには、ごまかすこともします。特に小さい子供の場合など、真剣になつて応待しない。時には頭の悪

い連中だからこの程度の授業でよからう、などといった加減な授業をやり勝ちである。自分の全分をぶっつけての対応は仲々やらないものです。かけひきが出てくる。ところが、先生と生徒が真剣にぶつからなくては、教育というものは成立しないのです。私たちの学校の宗教教育というものも、根本でこの誰とでも、いつでも、どこでも駆け引きをしないという誠実さを欠いたら全く成立しないのです。⁽⁴⁾

自分自身の問題

もう一人、本校九代目の校長を勤められました谷内正順先生のお言葉をいただいております。先生のことも、今の若い人たちはご存知ないと思いが、東大で恩賜の銀時計をうけられた秀才で終世倫理学を学ばれ、旧制の高校や専門学校、大学等で永らく教授をされましたが、その中間で、澤柳先生のお勧めと、東本願寺の切なる招きをうけて、赴任してこられた。期間は長くなかったが、たくさんのお仕事を残された先生です。大谷高校の今の校訓はこの先生がお作りになったもので、学校建学の教育精神を見事に表現された立派な校訓です。先生のお言葉に、

「道徳と宗教の問題というものは、その現れた現象面からみると極めて複雑である。しかし、その本質をとらえてみると、結局一つの問題にかえってくる。それは結局自分自身の問題である。」

「この自分自身の問題ということをもう少し展くと、三つの問題になる。」

一、この自分は今何ものであるか、という問いを自らにかけること。

二、この自分はまさに何ものであるべきか、どうあらねばならぬのか、という問いをかけること。

三、この自分は今何を行うべきか、という問いをかけること。

この三つの問いを自分に課してゆく人間、これが道徳的人間であり、宗教的人間である。」

こんなに明快に教えていただくと、もうつけ加えることもありません。教育とは人間を人間たらしめるものです。谷内先生のお言葉をいただくと、自分自身の問題にかえし、この三つの問いを自分に問うていくところに人間教育は成り立つわけですから。⁽⁵⁾

教師道

デュボンという人が、こういうことを言っています。

「教育に二つある。一つは他から与えられる教育、いま一つは自らが与えていく教育である。」

自らが自らに与えていく教育は無限であります。ただ、他から与えられた道徳や、宗教によつて人間が人間になれるわけではありません。いま申されたような問いを自分にかけていく、その中で、道徳も宗教も応答してくるものを持っているでしょう。私は、親鸞聖人が、真宗の教えが、私自身への問いかけに対して、これまでも、これからも答えて下さることを信じて疑いませぬが、しかし、先生方にそれを強いる気持はありません。だから、先生方の中に、キリスト教で答えが見出せたら、それで結構ですし、マルクスの思想よりないとお考えならば、それも拒否しません。

自分が本当になりたい、そうありたいというのが、あるか、どうかが大変なことです。いい加減な借り物の道徳や宗教、思想で、つまり身につけていないものを、生徒に見せかけていい恰好するのが一番いけないのです。自分がその中に生きており、生き抜ける自信があり、それが最高の生き方であるという確信があったら、それで生徒とぶつかり合うのが一番よいのです。それが無ければ、謙虚に生徒と一緒に、自分に問いかけることです。借り物や、見せかけは教育にならないのです。このことは忘れないでほしい。

それから、教師になるといろいろ教師としてしなくてはならぬ規定もあると思いますが、大体は、教育そのもの

のの本質から出てきた枠のようなものです。窮屈と思わずに、こなしてみてください。本当は、各自が、谷内先生のいわれる問いを自分にかけるならば、おのずから、自分の枠つまり自己規制や自己研修ができるのですから、私たちの学校の先生方には、私は自分で規制できないようなならば、他から規制しても、教育という仕事は出来ないのだから、と申しています。他から動かされなくては仕事の出来ない人は、教師だけはやってはいけません。教えることの大きな面は、相手の自発性、自主性を育てることです。みずからに自発的なものもなく、自律的なものもなく、どうして教育ができるでしょうか。限りなく、自分に問いつづけることの出来る人間になること、教師道とは、そういうものだ、私は思うています。⁽⁶⁾

まず、教師が主体的に自己を問うていけるような存在であるのかどうか、ということ。そして、その中で自分の持っているものを全力で学生生徒にぶつけていける誠実さを持ち合わせているかどうかということ。それが、師の言われるところの「生きている学校」実現の鍵を握っているということであろう。

「先生と生徒が真剣にぶつからなくては、教育というものは成立しないのです。」

自らは教師、相手は生徒と見ての高所からの言動が、いかに教育の本筋から外れたものであるか、師は厳しい言葉で指摘しておられる。しかしながら、師の言われる「教師と生徒」の有り様は、近年一部の教育現場で見られた、微温的、放任主義的な「平等意識」とは、当然ながら一線を画するものである。教員と生徒の立場の違いの認識、正しい意味での倫理観や嫉の追求といったものは、師の最も重要視された課題ではなかったかと考える。

「私たちの学校の宗教教育というものも、根本でこの誰とでも、いつでも、どこでも駆け引きをしないという誠実さを欠いたら全く成立しないのです。」

「他から動かされなくては仕事の出来ない人は、教師だけはやってはいけません。教えることの大きな面は、

相手の自発性、自主性を育てることです。みずからに自発的なものもなく、自律的なものもなく、どうして教育ができるでしょうか。」

師は大変倫理感の強い方であったが、それは基本的に他に求めるものではなく、自らの裡に向けられるものであった。しかしながら、晩年に研修会の講師として招かれ、殊に若い世代の教員を対象に話されたときに、繰り返し「自分の欠勤によって生じた一時間の休講授業の重みをくれぐれも認識できる教師であってほしい」と述べておられた姿を思い出す。

「限りなく、自分に問いつづけることの出来る人間になること、教師道とは、そういうものだと、私は思うています。」

師の言われた言葉の重みが今胸にせまる。

また、師が深く感銘を受けられた、「教育とは誠を行うこと」という澤柳師の言葉は、後述する、光華女子学園の校訓「真実心」解釈とも深く関わりを持つように思われる。

教師のあり方

学年末になって、進級のできなくなった生徒たちの親数名と膝つき合わせてお話しする機会を持った。

担任の先生の説明では、いずれもおさまらなくなった段階でのことであつたから、正直いつて私の心は重かつた。

しかし、思いかえしてみると、この生徒たちの心も重いことであろう。再修するかどうか、それに、今の高校は義務教育のような状態であるから、そこでの原級は、親たちにとつても世間体もあり、つらいことであろう。

そう思い及んでみると、自分の気の重いことなどというのは申しわけないことで、進んでわが身の努力不足をおわ

びすべきだ、と気が付いて、それぞれの親たちの家庭を訪問した。

理由はどうあれ、本人が学習不足のために原級にとどめられる、ということは、教師の立場からはきわめて簡単に割り切れることで、別に深刻な問題ではない。と私たち教師は考えている。

ところが、このたび親の気持ちを根気づよくきいているうちに、自責の念にうたれたのである。学業不振に陥った原因はさまざまであるが、なかには、親も子も他人に打ち明けられない根強い問題を持ち、苦しんでいた者もいる。また、生来の病弱で無理と知りつつ、せめて高校だけは、と必死に努力していた生徒とその親もいた。こうした子供たちの立場になって、さて私ならどこまでやれるのであろうか。また、私とその親であったとして、いったい何がしてやれるのであろうか。

学校という教育の場で、教育のプロである教師に、すぎる思いでたよっていた親たちの心情に、私は何一つこたえなかった。私たち教師がその名にかけて、生徒ひとりひとりの身になって、うけとめてやるという基本の姿勢を欠いていたのである。

原級という結果ではなく、そこに至るまでの教育者としての無責任さへの、やりきれぬ絶望であった。ただおわびすることだけで済むことではない。

(中略)

教師としての無力感におそわれるとともに、反面、「教育とは何か」を明らかにし、「我行精進、忍終不悔」のゆるぎなき精神が、こんな時こそ打ち樹てられないならば、一刻もこの職にとどまるべきでない、という緊迫感が心をゆさぶる。

責任を、政治や社会に転嫁して、わが身の横着と無能を省みようともしない教師たち、政治や、社会の変革にのみ心奪われて、教育を見失っている教師たち、こういう教師たちと五十歩百歩の自分を見出さざるを得ないの

は、何んとも口惜しいことである。

教師の在り方というものは、外的な条件によって規制されるものではなく、教育そのものの本質から規定されてくるものでなくてはならない。そうであるのに、みずからの日々の実践に、その教育を問うことを忘れているのでは、まさに自己放棄というよりほかない。

わが子にそむかれた親は、激情のしずまった日、幼少よりのわが養育の間違いの故に、わが子をして、親にそむかしめ、親を憎まねばならぬ不幸な境に陥し入れたふびんに、身をきられる思いを持つことであろう。わが子に人間として生きることの喜びを持たせ得なかった親の罪は、墮無間の苦しみを担っても許されるものではないかろう。

鞭もて打たれる教師たちは、鞭うつ彼等生徒の形相に何を感じるか。

彼らを三悪道に追いやったのは、ほかならぬこの自分であると、わが身に引きうけて、更めて教師のあり方を問わねばなるまい。⁽⁷⁾

教師というもの

教師というものは、自分が子どもを育ててきたような錯覚を持つという、おろかなものだと感じています。ということとは、自分が子どもを育ててきたことよりも、なにげなく言った言葉によって生徒を傷つけてきたほうが多いと思うからです。しかし、そういうことについては、生徒はなかなか言ってくれないのです。

こういう例があります。ある卒業生のクラス会で、いつも顔を出さない生徒がいました。その生徒のことが気になりまして、なにげなく「あの生徒はどうしているかな」と聞きますと、居合わせた友人たちが顔を見合わせるのです。「どうした」と聞きますと、やっと、「先生、中学二年のときに、物を盗んだという疑いの目で彼を見

たことはないか」と言うのです。よく考えてみますと、そのクラスで物がなくなつたことがありまして、その生徒がたまたま教室に残っておつたので、「誰か入つてこなかったか」と問いつめたことを思い出しました。今、振り返つて考えてみますと、「この子がやったのではないか」という気持ちがあつたようです。それが中学二年の生徒に敏感にひびいていたのでしょう。「人をどろぼうだと疑うような教師のところへなど行くものか」と言つていたそうです。

もう三十年も前のことですが、正直いつてこたえました。そのときに、教師というものは生徒の一生に深い傷を負わせるものだと思ひ知らされたのです。自分によつてプラスされた生徒は、みんなそのことを言うてくれます。しかし、自分によつてマイナスになつた生徒は、一人もそのことを言わないのです。それだけに、私たちがなげなく言つた言葉が、いかに生徒を傷つけているかということに気づかないのです。教師というのは恐ろしい仕事だということを、そのときに知らされました。

それから、別の例を挙げますと、私はいつも京都駅から学校まで歩いているのですが、ある日、京都駅に下りますと雨が降っていました。傘をさして歩きはじめたのですが、私の横を傘を持たないで走つていこうとする生徒がいたので、思わず大きな声で、「こら、待て」とやりました。その生徒はどきつとしたように立ち止まりました。私がよく叱つていた生徒でしたので、また叱られると思つたのでしょう。私が、「雨にぬれるじゃないか。傘に入りなさい」と言いますと、びっくりしたように私の顔を見ながら、もじもじと傘のなかへ入つてきました。

ところが、二、三日して、その生徒のお母さんが来られて、お礼をいいたいと言われるのです。私はそのことを忘れていましたので、「なんですか」と聞きますと、「うちの子が非常によく——」と言われるのです。私はなんのことかわかりませんでした。よく聞きますと、二、三日前に、子どもが学校から帰つてくると、何か

じっと考えていたのだそうです。そして、「はくは廣小路先生にいつもおこられているから、先生ははくのこと
を憎んでいると思っていた。でも今日、傘に入れてくれたので、先生が憎んでいないことがわかった。はくはや
っぱり迷惑をかけていた。すまなかつた」と言ったのだそうです。「それから心が変わったように勉強していま
す。有り難うございました」と、母親が礼を言うのです。

私がおそのとき、ふと思つたのは、こちらとしてはなにげなく発言したり、行動したりしているが、それがあ
る意味で、生徒の一生を動かすような力を持つことがあるのだということでした。

二つの例は、まったく反対のことですが、私の教師生活を反省してみますと、残念ながら、生徒の一生に深い
傷を負わせたことのほうが多かつたのではないかと、そう思わざるをえないのです。本当に心すべきことだと思っ
ています。⁽⁸⁾

師の永年にわたる教員生活の経験からいくつかの事例を紹介した。

ここには師の感得された「教師のあり方」が述べられているが、まさに前述の司馬遼太郎氏が洞察した通り、へ人
間への関心が強烈で、しかも、人間愛などというなまやさしい言葉であらわしきれないほどに人間へのかなしみを持
ち、すこしの喜びを大きく感じ、それを感じられないときの自分を嫌悪し、そうした涙をひきずりながら、人間の林
を縫い歩いている」という師の本来的な姿が浮かび上がっているように思われる。

師の教え子の一人である、元光華中学校長宮城駿師によると、廣小路師が大谷の生徒指導主任であつた当時、一方
では「鬼小路」という渾名を冠せられて畏怖され、時には恨みを買つた生徒の一人から国鉄(現JR)沿線にある師
の自坊に石が投げ込まれるという事件等も生じたいが、他方では驚くほど面倒見のよい一面があり、後年の同窓
会では当時のやんちゃ、生徒であつた面々からの慕われようは格別であつたらしい。特に厳しく接した生徒に対して

は、家庭状況の把握をはじめ、その生徒を理解しようとする努力は並々ならぬものがあつたようである。

「学校という教育の場で、教育のプロである教師に、すぎる思いでたよっていた親たちの心情に、私は何一つこたえなかつた。私たち教師がその名にかけて、生徒ひとりひとりの身になって、うけとめてやるという基本の姿勢を欠いていたのである。」「原級という結果ではなく、そこに至るまでの教育者としての無責任さへの、やりきれぬ絶望であつた。ただおわびすることだけで済むことではない。」

校長時代の原級留置生徒に対する配慮も同じである。教員側としては、往々にして成績の数字がすでにがあがつている会議の席上などで、生徒個々人の状況を通り一遍説明し、議決に委ねるという手順で済ませていることが多い。その生徒に関わつた一教育者としての自己の責任を問うことを看過して、その状況を招いたのは生徒個人や家庭の責任に帰するものであると、教師の立場からはいとも簡単に割り切れるのだが、実はその点こそ、教師の側が最も戒めべき点であると、厳しい言葉で述べておられる。本来直接的な現場からは距離感があるはずの校長自らが個々の生徒や保護者を深く思いやる姿が胸を打つ。ある意味で師の姿勢は、原級留置という結果を超えて、当該の保護者生徒にもっと大きく、深いものを与えたのではないだろうか。

「教師としての無力感におそわれるとともに、反面、「教育とは何か」を明らかにし、「我行精進、忍終不悔」のゆるぎなき精神が、こんな時こそ打ち樹てられないならば、一刻もこの職にとどまるべきでない、という緊迫感が心をゆさぶる。」

学業面であれ、生活面であれ、いつの時代にも不安定な状況（一見努力不足に見えたり、規範意識の欠如した状況）を呈している生徒は学校内に一定数見受けられるものである。しかし、教員はそういった対象生徒にこそ、目をやり、自分の持てる力のすべてを賭して受け止め、導いていく姿勢が必要なのだ、それこそが教育者としての私たちの本務なのだ、と師の主張は一貫して厳しく響いてくる。

本当の教育をとりもどそう

たまたま明年は、創立百年を迎えます。形骸化したこの学校の教育を本当に実り豊かな、建学の精神に則った学園にしてゆかなくてはならない。そう考えておった時であります。しかし、こういう状況ならば、現在のような状況ならば、私は学校の存在理由などはないと思う。むしろ減ほすべき学校だとさえ考える。学校が潰れることなど、実は私はなんでもない。しかし、現に今ここに、一人ひとりの命がかけられている。そういう人間の命を生き抜いていく力が奪われていくような教育がここで行われているということならば、私は断じて許さない。そのため、全教職員が一致して、全体の中で(本当の教育をとりもどそうじゃないか)、こういう決意を固めた。……本当の教育とは何だ。……ただ単に知識を得るといふ、そういうものじゃない。われわれの社会の生き方を正していく。われわれの社会をより深め、向上していく、そのための学問である。もちろん、そのための方法をとるためには、予断と偏見は許されない。あくまでも健全な、明確な理論のもとに行われなければならない。これはあたりまえのことである。だから、教師というものは、実は単なる知識を与えるものではない。諸君に対し、正しい生き方を教えていくところの教師でなくてはならない。これは、教師の本分であると思う。この大事なものを私達は忘れておった。もつと極端に言えば、知識すらも本当に忠実に諸君に与えておったかどうか、それすらも私は疑問だと思えます。マンネリ化したなかにあつて、平然としてあぐらをかくことは、私にはや許されなと思う。私達は、あくまでも諸君とともに学んでいくことによって、諸君の一人ひとりの命を大事にし、諸君の生き方を正しく導いていく、そういうような教師でありたい。そのための努力する。いっしょにやろう。そういう呼びかけをしたのが今日である。……⁽⁹⁾

この項の最後に紹介したのは、昭和四十八年、大谷中高を揺るがした「差別事件」の折りに、校長として全校生徒の前で所信を表明された言葉である。「大谷には真の教育がない」事件に傷つき、そう訴えた一生徒の思いに応えるべく、校長としての存在を賭した、厳しく誠意にあふれた言葉が、教職員、生徒らの胸をうったと聞く。

当時の形骸化していた学校の状況や、マンネリ化し、緊張感に欠ける教員の活動に決して満足していなかった師ではあったが、翌年の記念行事等を通じて、「今一度建学の精神を問い直す」という意気込みは間違いなく持つておられたに違いない。

そうした折りに生じたこの事件は、校長在職二十六年目を迎えられた師自身にとつても、大きな衝撃であったことは想像に難くない。

「『こういう状況ならば、現在のような状況ならば、私は学校の存在理由などはないと思う。むしろ減ほすべき学校だとさえ考える。学校が潰れることなど、実は私はなんでもない。しかし、現に今ここに、一人ひとりの命がかけてられている。そういう人間の命を生き抜いていく力が奪われていくような教育がここで行われているということならば、私は断じて許さない。そのために、全教職員が一致して、全体の中で（本当の教育をとりもどそうじゃないか）、こういう決意を固めた……」

これは師の言葉としてはかなり激しく、感情的と言ってもよいほどの印象がある。しかしその中に、（この機会を逃しては大谷の再生はあり得ない）との悲痛な思いが感じられる。

ある意味で師はこの事件を、（現在の本校の状況が招いた、起こるべくして起こったもの）と捉え、深い慚愧の思いと共に学校再生の願いをこの機会に賭けたのではなかったか。

「本当の教育とは何だ。……ただ単に知識を得るといふ、そういうものじゃない。われわれの社会の生き方を正していく。われわれの社会をより深め、向上していく、そのための学問である。もちろん、そのための方法をとるため

には、予断と偏見は許されない。あくまでも健全な、明確な理論のもとにおいて行われなければならない。これはあたりまえのことである。だから、教師というものは、実は単なる知識を与えるものではない。諸君に対し、正しい生き方を教えていくところの教師でなくてはならない。これは、教師の本分であると思う。この大事なものを私達は忘れておった。」

この表現には師の教育観と、当時の学校の現状に対する慚愧の念がすべて吐露されているように思う。

「もつと極端に言えば、知識すらも本当に忠実に諸君に与えておったかどうか、それすらも私は疑問だと思えます。マンネリ化したなかにあつて、平然としてあぐらをかくことは、私はもはや許されないとと思う。私達は、あくまでも諸君とともに学んでいくことによって、諸君の一人ひとりの命を大事にし、諸君の生き方を正しく導いていく、そういうような教師でありたい。」

余談ではあるが、筆者が大谷高校に入学したのが、まさにこの翌年の昭和四十九年、創立百周年の年であつた。思ひ起こすと、当時の大谷高校の先生方には確かにある種の〈熱気〉があつたように思う。筆者は決して優良な生徒とは言えない上に、どちらかという目立たず、特徴のない存在だつたように思うが、なぜか(一人の人間として大切にされている)という思いはあつたように思う。前年度の事件を機に校長としての師のリーダーシップが最も発揮され、教職員もその感化を大きく受けていた時代だったのかもしれない。

4. 廣小路先生の親鸞像―教育観の根底にあるもの―

廣小路師の「親鸞論」として、論文の形をとっているものは、昭和四十八年(宗祖生誕八〇〇年の年)に、真宗大谷派宗務所出版部から上梓された「親鸞のひかり」(菊村紀彦・川瀬和敬氏と共著)所収の「親鸞にみる、青年の勇

氣と決断」(後に「縁に随う」に「親鸞にみる勇氣と決断」と改題し再録)のみである。大谷大学で山田文昭師の御指導の下、仏教史学を専攻された廣小路師であるが、その「親鸞論」は、いわゆる学究的、文献学的な興味、関心が中心ではなく、親鸞聖人の青年期の事象を、自己の人生や信心と照応させながら語られた、ある意味での信仰告白ではなかったか、と思われる。

子の母をおもうがごとくにて

いま、親鸞という人の長い人間形成への歩みをたどってみると、この人の身近に、この人にとつてすべてであった人によって、限らない愛情の満足が与えられていたことを信じたい。たとえ、その期間はわずかであり、間もなく、父との生別、母との死別があったとしても、生後数年間の充足が、そうした別離を超えて、親の念力を食として生きる道を見出させてきたことであろう。直接には、この充足は、九歳出家後の生活において、親鸞がつねにみずからの行動を選択する場合の、よりどころとしての力をもったにちがいない。

幼い日のその家庭での人間や、家族の生活態度、人間観、社会観などが、その子の心に刻みこんでくるものは、ことのほかに大きい。私は、人間に対する深い信頼をいただき、限りなく他にあたたかくはたらきかけていく人を見ると、その人の幼少期における深い幸せを、しみじみと感じる。生後数年のあいだに満たされた愛情は、その後の不可抗的な変化などによって断ち切られるものではない。むしろ、別離において深さを増し、純化されてくるものである。

子の母をおもうがごとくにて

衆生仏を憶すれば

現前当来とおからず

如来を拝見うたがわず

「子の母を憶う」心は、究極的には、「母の子を憶う心」に想っていたることであろう。想っていたところに、子の心は、はげしくゆさぶられるものを内に感ずる。それは、親の念力が子の心に届くということにほかならない。振り返ってみれば、われ、母を憶うのではなく、母の憶いによつて、現にいま、われ生かされているという深いよろこびである。しかし、母の子を憶う心に想っていたのは、いつの日であろうか。それは、わが身が耐えかね、難洪の日々を経験しているときではなからうか。難き日、そこに想っていたるとき、心ゆさぶられ、みずからを押し進めうる力を恵まれる。

この和讃は、親鸞その人が九歳出家の後、環境に落在することなく、ひとり真実を求めて孤独の道を歩んだ日々、母のわが身を憶う心に想っていたつては、きびしくみずからを律し、策動してきたすべてが、あげてわが努力ではなく、母の念力による護持養育のたまものとしたただかれた感激、よろこびが、如来の大慈悲心と重なり合つてにじみでている一首であろうか。少なくとも、そういうひびきがきこえてくる。⁽¹⁰⁾

また、これ以外の著作も含め、師の親鸞像を拝察していくと、

「『如来の本願』とは(真に自分の道を見つけること)に他ならず、何が大事か、命を賭けてもやらねばならぬことか、というものに出会うことと言ひ換えてもよいかと思われる。私たちは、それがはっきりしなくては、命の賭けうがない。

したがって、私たちが(如来の本願と出会う)ということの意味も、それ以外にはあり得ない。」
そういった師の領解に出遇うこととなるが、これは前述の師の教育観と寸分違わず重なってくるものであろう。

5. 宗教教育顕現の場としての「家庭教育」

家庭教育と宗教

廣小路師は、宗教教育は特別な仏教行事の実施や仏教教義の解説によって示されるのではなく、現実生活の中でいかに自覚的人間となり、人間性を回復させる仕事に取り組んでいくか、日常の中で仏教を証明していくか、という営みに尽きると述べておられるが、その意味で最も重要な場として示されたのが「家庭教育」であった。殊に活動の場を女子の高等教育（光華女子大学）に移されてからは、文字通り最重要課題とされていたように思われる。自身の体験がその背景に感じられる。

親が子どもを意図的に教育していこうとすれば、当然、「家庭生活はどうあればよいか」という問題に帰るはずです。本当に子どもを立派に育てたいと思うならば、現在の家庭生活をそのまま認めるのではなく、「これでいいのか」という問いかけがなされなければならぬと思います。そしてその問いは、とりもなおさず、「親自身はどうなんだ」という問いにならなくてはならないのです。親自身が人間としてどう生きておるかということが問われなかったならば、意図的な家庭教育というものは意味がなくなると思います。そこに初めて、親は子どもを見て、子どもと共に親になっていく道が生まれてくるのです。

なぜこんなことをいうのかといいますと、実は私、この五月から女子短大で、急に「家庭教育」の講義を持つことになったからなのです。自分の学んだ学問は仏教なので、自信がなかったのですが、私自身にも勉強して

たい気持ちもあって、結局は持つことにしました。そこで、あわてて本屋を駆け回って、二十冊あまりの「家庭教育」と名のつく本を集めてきて読んでみました。そのなかで気づいたことが二つあります。

一つは、日本の家庭教育の本では、不思議と家庭における宗教ということにふれておらないということです。外国の家庭教育に関する記事を孫引きしてある書物を見ますと、宗教というものは、幼児の人格形成に重大な影響を及ぼすということが、特記してあります。この違いが気にかかったことの一つです。

もう一つは、家庭教育を書いた日本の学者たちの多くが、親は親としてすでに出来上がったものとして見ているということです。つまり、親が親の座にしっかりと腰をおろしているものとして見ていることでは、重大な問題ではないかと思いました。

家庭において、本当の宗教的自覚といえますか、本当の宗教心というものがあるならば、親が親の座に腰をおろしていることを許さないような自己への迫り方が必ず出てくると思います。親が親であるということの上に立って、子どもをしつけ、教育していくという考え方は、うっかりすると大きな思い上がりになるおそれがあります。この思い上がりのうえに立った場合の親の発言が、子どもの耳に入らないのはあたりまえです。⁽¹¹⁾

親の心・子の心

親の心は微妙に子の心に反映するものです。親のほうにこうした反省が動き、口先だけで叱ることがなくなれば、子どものほうもそれをよいこととして凶にのるといことはほとんどなくなり、子どもの心の中に、いつの間にかこの親心に通っていくものです。子どもは、はじめは格好がつかないので、つまりぬ理屈をこねるかもしれませんが、そのうちに自分を反省するようになるものです。いくら立派な道理を並べ、子どもに言い聞かせても、親の心の底に一片でもエゴが動いておれば、子どもはどこかで、本能的に何かとすりかえられているという

不信任を感じるものです。

私は、親を憎んで生きるということは、人間にとっていちばん不幸なことだと思っています。子どもをそういう不幸な人間にしてしまった罪の深さを親は知らねばならないのに、案外、世の親たちは「この親不孝者が」というような対応をしがちです。これでは親子ともに救われる日はないでしょう。

また、親たちのなかには、「この子はだめな子だ」とか、「兄弟のなかでもいちばん出来が悪い」などと、心ないことをいう人があります。どうしてそんなに烙印を押したがるのでしょうか。人間が人間に対して、その人の未来を断定するようなことができるはずはありません。親といえども、もし子どもに向かってそういうことを言うならば、それは思い上がりもなはだしいことで、親になれない人でしょう。

私は仏様から、「おまえは必ず仏になれる身だ」と保証してもらったうえに、「だから、やけなど起こさずに自分を大事にせよ」と言いきかせていたでいるこの自分を有り難いと思っています。私たちにわが子の全部を知る力などあるはずがありません。けれども仏様は、大きな智慧によってちゃんと見通し、保証してくださいているのです。私はそれを信じています。そこから出てくる表現としては、「やればそれ相應のことは必ずできるよ」とあたたく包んでやることだけです。そういうところに、親と子との心の通い合う場も生まれてくるでしょう。人間のいちばん美しい成長はそこにしかないのではないのでしょうか。

親の澄みきった心に子どもが反応するのです。その親の心が澄みきっていくためには、親の側にいつも、親らしい親になりえないという深いかなしみがなくてはならないのです。⁽¹²⁾

「親自身が人間としてどう生きておるかということが問われなかったならば、意図的な家庭教育というものは意味がなくなると思います。そこに初めて、親は子どもを見て、子どもと共に親になっていく道が生まれてくるので

す。」

真宗の念仏者であること、一人の教育者であることは、言い換えれば一人の家庭人であること、よき親であり、子であることと完全に一致するものではないか。むしろ、一人の家庭人として「いのちの受け継ぎ」を自覚するところからしか、真の教育も宗教も生み出され得ない。師の言葉を読み解く中で、筆者はそう領解した。

「私は仏様から、『おまえは必ず仏になれる身だ』と保証してもらったうえに、『だから、やけなど起こさずに自分を大事にせよ』と言いきかせていただいているこの自分を有り難いと思っています。」「親の澄みきった心に子どもが反応するのです。その親の心が澄みきっていくためには、親の側にいつも、親らしい親になりえないという深いかなしみがなくてはならないのです。」

親も教師も、一人の人間としての悲しみを抱きながら、子どもたちと共に生きていく。しかし、そこには自らの足下を照らしてくれる灯火が必要となってくる。それこそがまさしく「真宗に遇う」ということではないかと思う。

親子の救い・祖母の救い

昨年十二月三十一日、三十三歳で小学校二年、一年と四歳の幼い子たちを残して逝った若い母親のお申いをした。明けて正月の四日、初七日にお参りしたとき、この子たちが母方の祖母と一緒に読経の間じつと正座している。まことにつらい光景であった。

ふた七日の夕方、父親はまだ帰宅していない。祖母なる人が、「娘はその子たちを残してはどうしても死ねなかつたようで、最後の最後まで生きようともがいたのがかわいそうで……」と絶句された。なぐさめる言葉もない。

なによりも、ごぞことし、老若男女おおくのひとびとの死にあいて候うらんことこそ、あわれにそうらえ。ただし、生死無常のことわり、くわしく如来のときおかせおわしましてそうろううえは、おどろきおほしめしからずそうろう。

親鸞の消息のこの言葉を嘔みしめながら、しかし、言いたしたのは、「わたしの母もその年齢で、旧暦の元日に死にました。」の一言だけであった。そして愕然としたことは、今日まで我が祖母のかなしみに思い至ることのなかつたうかつさであった。

人間は妙なもので、こんな場合、遺児のいとおしさだけは口々にいうが、祖母のかなしさに胸ふさがる思いをする人は少ないようである。ときとしては陰で、「お年寄りと代わっておればよかったのに」などと冷たいことをささやきあっている。はたからみればそのとおりであるから、つめたいという言葉は当たらないかもしれないが、実は、そのことを一番身を切られる思いで感じ、心引き裂かれているのは祖母である。娘の枕許で、どんなにか代わってやりたいと思ったことであろう。

今生にいかにいとおしふびんとおもうとも、存知のごとくたすけがなければ、この慈悲始終なし。

人間の慈悲とか、愛情というものは、所詮、ぎりぎりのところでは、いつも無残に断ち切られてしまうものである。決して末通るものではない。このことに突き当たって初めて人間は、いま生きているこの一日の愛情が、どんなにかげがえのない大切なものであるかに目を覚ますのではないだろうか。

凡情の常として、生きている間はそれがいつまでも続くような甘えのなかで、不用心に他を傷つけ、自分を粗末にしている。そして、「生きることが精一杯で周囲を考える余裕がない。」などと勝手な言い訳をしているが、実はそのことが、自己の現在を捨てているあわれな姿にほかならない。

老母はまたこうも嘆いた。「この子たちのお父さんは、線香の匂いが嫌いだから、遺骨を早く墓に納めると言

いますが、せめて忌明まではこのまま安置しておくように話していただけませんか。」と。

この父親は三十三年前、四才のとき、相次いでその両親を失った。五人兄妹の末で、数年後、祖母の死とともに一家は離散した。不幸な運命を背負い、苦しいことも多かつたようである。今、一家を構え、ようやく幸せになつたのに、またもその幸福は崩れたのである。祖母はふとこんな言葉を漏らした。「私はここを追い出されるまで、何としても孫の面倒をみてやりたい。」

父親のかすかな心の動きで、老母は早くも本能的に何かを感じたのであろうか。どうやら、私は死者と向かい合う姿勢を変えねばならないことに気づいた。三七日の夜、参詣された有縁の方々を前にし、死者を背にしてこんな話をした。

「縁あつてお甲いをし、中陰のお勤めをさせていただいていますが、これが死者に対してどのような意味を持ち、また、どのようなはたらきを持つか私は知りません。ただ、みなさんに申し上げたいことは、この若い母が、もうどうしてみようもないとわかつたいまわの際に、その心に思い詰めたものが何であつたか、それを考えてあげてください、ということだけです。そして、その子たちが、いつかはこの母の悲念を生涯をかけて問うていける人間になるように、育て見守ってあげてください。このことだけです。子どもたちが母をしつかりと胸に抱きとめる日がきたとき、そのときこそ母も子も救われることでしよう。」と。

そばで静かに聞いてくださっていた中年の方が、「ありがとうございます。私は小学校の教師ですが、これでこの子らの指導ができるような気がしてきました。」と深く頭を下げられた。⁽¹³⁾

ご自身、その生涯で多くの肉親の死を見つめられた廣小路師が、一住職として出遇われた若い母親の死。その遺された幼子、父親、祖母への毅然としたなかに慈愛に満ちた語りかけを通じて、師ご自身の人生と教育者としての姿

勢が浮かび上がってくるようである。

そうして師は別の稿で以下のように述べておられる。

わたしはこの五十年、亡くなった母を悲しませたくない気持ちに支えられて生きてきたと思っていた。

しかし、やっぱり間違っていたようだ。母親というものはどんなに早く死んでも、わが子の心に生き、わが子を育てていく念力を持っている。ということが解りかけてきた。「悲しませたくない」というような思いは、身のほど知らずの思いあがりすぎなかつたのである。⁽¹⁴⁾

6. 宗教教育の課題

本当の宗教教育

教育は、もともと人間が人間を人間にまで育てていく営みです。しかし、その人間が独存的(一人で存在する)なものとしてとらえられてきたときに、人と人との間柄というものが失われてしまうのです。仏教は、人と人との間柄を大事にする教えなのです。相依相関ということをいいますが、人間の在り方は相依性というところがあり、お互いに相依り相関連し合って生きている存在なのです。その人間の相依性というものを失ってしまつて、独存的な考え方を育ててきたところに、教育の大きな欠陥があったと思うのです。

私は、本当の宗教教育というものは、何も仏教の教義を教えたり宗教行事を行うだけではないと思うのです。そのようなことを頭に入れながら、本当の意味での人間性を回復するような教育を行っていくことであつて、全

校をあげてそれに取り組んでいく、それが本当の宗教教育ではないかと思っています。⁽¹⁵⁾

宗教教育の課題

今日の社会は宗教の関係する分野が狭められて、宗教の孤立化が目立っているが、そういうことが、逆に宗教の存在を私たちの日常生活そのものの中で証明せず、特殊な場で証明しようとしていると思う。常識的には既成教団の内部とか、宗教儀式の中で見ようとしているから、宗教儀式をすれば、そこに宗教がある。本山のようなどころから坊さんや教師がくれば宗教がある。法衣をつけておれば宗教的であるというような風潮がある。

これは人間生活の一部分に宗教の存在をみる考えと一致し、ひいては宗教を文化の一部分として考えるところにも通じていく考え方だと思います。そういう次元でとらえる限り、道徳教育も、宗教教育も同じで、どちらをやってもよいということになるのでしょうか。しかし、本当の宗教というのは、人間生活の根柢となり、人間生活を成り立たせるものなんでしょう。そういうものに目を向けさせてゆくとというのが宗教教育でしょう。そういうものを見失っている今日の社会に、それを気付かしめ、それを回復するということは、たしかに困難なことである。けれどもやらなければならないことでしょう。しかも今日の学校教育の体系の中で、教育的な処理をしながらやっていくということは大変であろう。⁽¹⁶⁾

真の自覚的人間

高校での宗教教育は、一つの信仰に他を強要するようなものではないと思う。また、手軽く道徳教育の代用品にされても困る。端的にいいつくせば、真の自覚的人間を生み出すことであり、この方向に、宗教教育の在り方が正しく保たれなくてはならない。そのためには、まず、これを担当する教師自身に、「いま、ここに、自分の

全分を尽くして立つ」の自覚にもとづく姿勢が求められるのである。かくいうのは、若い生徒たちにとっては、「この人」にあうことによつてのみ、彼ら自身にあう機縁を熟させていくのだ、と言つてもよいと思うからである。この点を看過したら、高校における宗教教育は、殆ど成立しなくなってしまう。

したがつて、教師が、「この人」でなければ、宗教教育は成り立たない、という道理のまえに、つねにみずからに帰り、みずからをひきしめるならば、おのずから若い彼らに相あう日もめぐまれることであろう。

私は、現在の宗教教育として実施されている内容を、軽視する気持ちはないが、ただ根本を忘れたならば、その意味を失うのではないかと、自分に言いきかしているだけである。⁽¹⁷⁾

謙敬聞奉行の人

人格は、「教育によつて生徒ひとりひとりの個人的、社会的適応のしかたの枠組を与え、その様式を示し、その基準となる価値観を習得させることによつて、かれらの生活を統合していくところに」形成されるといわれる。私どもは、この意図的、継続的でないとなみの中で、仏教の示す「真実の人生」「人間の本性」を明かにしつつ、それがかれらの人格的適応を規定する価値観の基準成立にまで導いていくのが、いうところの宗教教育だと考えている。「真実の人生」とか「人間の本性」といつても、仏教はかく説いている、という知識を与えて終ることではなく、生徒の生活の中で感得する、すなわち生徒の主體的自覚の水準にまで高まることでなくてはならない。ではどのような方法によつてそれが可能か、この問題を考えていく場合、仏教の教化はどのような条件下で成立するか、の問題が先に横たわっていると思う。

（中略）

結論としては、宗教教育はこれを担当する人の問題が一番大切であることを痛感している、とのべておきた

い。その人をうるということは至難なことである。私どもにとつて、「その人」とは、端的にいつて宗教体験者ではなく、謙敬聞奉行の人である。この言葉は文字の如くに、「謙敬に聞きて奉行する人」の意味であるが、經典は、その反対の語をもつてきて、これを明かにしているようである。それは、「僣慢、弊、懈怠の人」はこの法を信じ難し、と説いているからである。(謙敬、僣慢)、(聞、弊)、(奉行、懈怠)と対応して理解することが正しいようである。特に「聞」は親鸞においては「信」と同義語であり、真宗の肝要をこの一字に収め、「聞」の生活の中で、自然に教化の成り立つことを確信していたのではないかと思う。その意味においては、私どもの宗教教育という場合、方法論の前に謙敬聞奉行という聞法の態度が自らに求められなくてはならないのである。このことは、宗教教育をうけもつ人は宗教体験者でなくてはならない、ということではなく、まじめな聞法の人でなくてはならないの意味である。

この人が宗教教育の場での不可欠の条件であろう。きわめて平凡なことであるが、どの教科を担当しようと、この種の先生が、ひとり、ふたりと数を加えることによって、学校の雰囲気はあらたまることであろう。

そこにまた宗教教育可能の基盤が固められるわけである。⁽¹⁸⁾

師の言うところの「本当の宗教教育」とは、別の表現で言うならば「学校全体が宗教の中で活動している教育」を指し、「学校の中に宗教的内容を取り入れている教育」とは、似て非なるものとして明確に区別されるべきであろう。

例えば、「宗教行事」を行い、「宗教」に関連した講座や授業を取り入れることそのものは、宗教教育の取り組みとしては、極めて重要で意義のあることと考えられるが、逆に言えば、そういった内容を取り入れているから「宗教教育」が成立しているのとらえることは本末転倒も甚だしいと言わざるを得ない。

本場の「宗教教育」とは、本場の意味での人間性を回復するような教育を行っていくことであり、真の自覚的人間を生み出すことであるとすれば、やはり、師の言われるとおりこれを担当するところの教職員が「謙敬開奉行の人」(まじめな開法の人)でなければならぬ。

そして、そのためには「研修活動」が何よりも重要な鍵を握っているのではないかと考える。

言葉を換えれば学校という組織そのものに「正しい宗教教育への認識」があるかどうか問われてくるということである。

本学園宗教教育の課題

ここで、まことに僭越ながら、本学園の宗教教育の抱えている課題について、廣小路師のお言葉からいただいた言葉を中心に、私見を述べることをお許し願いたい。

ただし、前述したように、筆者は中学高等学校という、本学園の中等教育を担当してきた経緯があり、幼稚園、小学校、また短大、大学という各校園での経験は(大学での授業を除いて)ないので、必然的に中高での活動と学園宗教研事を通じての経験に基づく記述となることをあらかじめお断りしておく。

(一) 教職員研修(宗教教育への共通理解)

本学園の宗教教育は、当然のことながら(狭義の)「真宗大谷派の伝道」を目的とするものではない。生徒も教職員も「信仰の自由」は保証されているし、信仰を強制されるようなことはあつてはならない。

しかしながら、生徒も保護者も本学園が真宗大谷派の関係学校であり、親鸞聖人の教えに基づく教育を実践していることを承知の上で入学してきたわけである。特に、教職員はそのことを前提として本校に就職したわけである。

したがって、すべての教職員が宗教教育に携わり、それを通じて、生徒に人間として大切なものを伝えていく義務

があると考えられる。

また、「宗教教育」を特異な教育として見るのではなく、「宗教」自体が本来その中に持っている「公共性」「普遍性」をより具体的に実現していく「教育」であるにとらえるべきであろう。学園の「教職員必携」の冊子の中にも以下のような記述がある。

教育はつねに宗教と相俟って真実の人格を作り、宗教は教育によってのみその真実を伝えうるとすれば、本学の教育は、仏教精神、真実心⇨慈悲の心の薫習によって人格形成をおこなうことを主眼とする。ここに学ぶ人間は、自己に対しては自らを律し、他に対しては深い慈愛の心を育み、共に相和して永遠の世界をめざすものとなる。⁽¹⁹⁾

こうした点を踏まえ、本学園の「宗教教育」を実践していくにあたっては教職員の共通理解がぜひとも必要であると思われるが、総合学園という性質上の制約もあって、現時点ではそれが満足な形で成立しているとは言い難い。したがって教職員研修は最重要課題であり、これが正しく成立すれば、以下の課題も自ずから解決されていくであろう。

その内容としては、

- a. 真宗大谷派関係学校における「宗教教育」について
- b. 光華女子学園の「建学の精神」について
- c. 各校園での（発達段階に応じた）「宗教教育」の理解と実践について

（当然ながらこの三者は相互に関連し合うものである）

といったものが予想されるであろう。

(2) 学園宗教行事への参加(発達段階を踏まえた、趣旨の明確化)

現在、学園では三大行事(花まつり、報恩講、太子忌)に(成道会、涅槃会)を加えて五つの行事が実施され、それぞれの行事に各校園の代表(学生、生徒、児童、園児代表)が必ず出席している。以前に比べると、学園宗教部の努力もあり、参加上の問題点もかなり改善されたが、根本的に思うのは「発達段階に応じた趣旨の明確化」である。もう少し具体的に述べれば、(代表参列は実施するにしても)各行事の対象もある程度限定し、その行事の意義・目的をさらに明らかにした方がよいのではないかと考える。

例を挙げると、「花まつり」の行事は低年齢の園児、児童を中心に、華やかで楽しい行事の内に(へ生まれてきた意味と生きていく喜び)を(その年齢なりに)感得させる方向が望ましいし、「報恩講」等は逆にある程度の理解力が身についた学生生徒を対象に、(自身を見つめ直し、真の人間性を問い直す場)としての設定が求められるのではないか。

また、趣旨を事前指導などで徹底し、厳粛な気持ちで行事に参加させることは肝要であろうが、寺院等の行事とは一線を画し、過剰な宗教色は避け、むしろ簡素に実施することが望ましいと考える。

(3) 「宗教科」授業の充実

前述のように、筆者が「宗教科」を担当しなくなると、数年が経過した。「宗教科」と距離を置いて改めて思うのは、この教科の重要性である。関係学校における「宗教」の授業は、ある意味でその学校の教育に対する姿勢や、教育内容を象徴するものだと思うからである。

しかし、その内容設定や指導方法は大変難しく、担当者の努力を要するものがある。一つにはテキストの扱いの問題。二つには評価の問題があるが、両者はまた微妙に関連し合っている。

具体的には、宗教科も一教科である以上、その評価が必要になるわけであるが、他教科との整合性や不公平感の解消を意図するあまり、知識主体の考查問題が設定されることが案外多いようである。従って、それは教科のカリキュラムにも逆影響を与え、釈尊伝、親鸞伝、あるいは仏教通史の知識事項が授業の中心となり、いかにも「仏教」の授業をやっています、という雰囲気の中で、自己満足的に完結していることが多い。

それは、真剣に人生の意味を考えたり、自己の有り様を見つめ直すような機会とは別物であると言わざるを得ない。

もちろんこれは一面的な見方かも知れず、実際には記述形式なども十分に取り入れたり、興味・関心を喚起するための工夫を凝らしている担当者もおられると思う。

しかしながら、全体的な印象としては、私学危機の影響下で、「宗教科」も本来の存在価値を喪失しつつある、と言うのは言葉が過ぎようか。今一度、中身を見直し、その充実を図りたいものである。

（4）宗教教育実践の場としての「生徒指導」

光華女子学園が伝統的に大切にしている宗教教育実践の言葉として、「薫習」がある。

「薫習」とは「仏教語大辞典」によれば「もともと香りのない衣服に香りを薫じつけるとその衣服にも香りが漂うように、あるものにはたらきかけるとき、そのものがだんだんとその影響を受ける作用。習慣によって心にしみついたもの。」とある。

したがって「薫習」そのものが宗教教育の実践にとってたいへんすばらしい方法であったとしても、良い影響も悪い影響も与えうる「両刃の剣」的なものであって、文字通り「薫習する香り」の中身が問われてくることになる。

本来的な意味での宗教教育が、廣小路師の言われるごとく「本来の意味での人間性を回復するような教育を行っていくことであり、真の自覚の人間を生み出すこと」であるとすれば、それが実際に実践されていく場合は、宗教の授業

や宗教行事の席上ではなく、日常の学校生活の中にこそ存在するはずである。(宗教科や宗教行事はむしろそれを確認し、証明する場としての意味がある。)

したがって、教員の活動としては「生徒指導」(広義では、教科やクラブでの活動も含むと思われる)の場でこそ、最も教員の宗教教育実践の姿勢が問われるのではないだろうか。

前述の「薫習する香り」の中身は、各教員が担任指導や教科指導、日常の生活面での指導、あるいはクラブ指導を通じて、自分の持てる力のすべてを賭けて接し、導いていく姿勢の中から自然に生み出されてくるものであろう。

そして、繰り返し言うようだが、そのためにはやはり教職員の「研修」が大きな鍵を握っているのではないかと考える。

7. おわりに—ほんとうの宗教教育を求めて—

昭和五十二年、四十数年にわたって在職してきた大谷中高を退職された廣小路師は同じ真宗大谷派の関係学校である、光華女子学園に学園長として招かれ、翌々年には光華女子大学・短期大学の学長に就任。男子の中等教育から、女子の高等教育へと場を変え、さらに教育活動にご尽力いただくこととなる。光華の招きに応じられた理由は、大谷智子総裁の深い信頼や、阿部現亮理事長との厚い友誼に応えられたとのことだが、若くして亡くなった母への想いから、後半生を女子教育に捧げる決意をされたと考えるのは、筆者の穿った見方であろうか。

一期一会

私ごとになりますが、私がこの短大で初めて仏教学を講義することになったとき、仏教学はまだ随意科目であ

って、卒業単位としては認定されていませんでした。学生は卒業単位になる科目に出席しますから、授業を聞きにくるのはまったくもの好きな学生といえるかもしれません。それでも最初は十人ほどが出席していました。それがだんだん減ったのですが、最後まで聞いてくれた学生が三人いました。その人たちも教育実習などで休むことがありましたが、その中でたった一人、一年間、欠席も遅刻もせずに私の話を聞いてくれた学生がいました。私は『歎異抄』を輪読し、さらに少し手を伸ばして、道元禪師の『正法眼蔵随聞記』から数章を一緒に読みました。その学生は、別にノートをとるでもなく、私の顔を見つめながら、本当に熱心に私の話に聞き入ってくれました。

その学生が卒業間際、最後の講義が終わった後で、私に手紙をくれました。そこにはこう書いてありました。一年間ありがとうございました。先生におあいすることができ本当によかったと思います。いろいろと先生のお言葉から人生についておそわることも多く、今までの私の学校生活のなかで、先生の授業は一番深く印象に残るものだと思います。私は小さいころから死のことを考え、真夜中に目を覚まして泣いたりしたこともあり、今でも（生意気のようにですが）世の儚さ、不条理を考えると、まるで自分に自信のない人間です。こんな私が先生の講義を受けているときは、まだ別の自分の知らない道がある、まだ生きていく道はあると思えて安心できた時間でした。寒さきびしい折からご自愛下さい。いつまでもお元気でおいで下さい。

こういうあたたかい手紙をくれたのです。尾道の人であったと思います。私はいまでも彼女のやや寂しげなやさしい顔と、私の話に聞き入ってくれた姿を思い浮かべます。その学生が卒業後どうしているか私は知りません。卒業式の前日、その学生に会って、「就職は」とたずねますと、「就職はしません。家へ帰って和裁をやりま

す」と言うていました。

考えてみればこの短大で七年間授業を持ち、仏教学が必修になってからはたくさんの学生さんに講義してきました。しかし、「自分の学生生活の中で、この授業に会い得たことが一番の幸せであった」と言うてくれたのはこの学生一人でした。そういう意味では、私が本当に「出会った」といえるのも、この学生ではなかったかと思っております。そしていまでも私は、この学校で、一人の学生との間に心の交流があったという、大きなよろこびを持っております。十年経ったいまも、何かの折には私の心のなかにこの学生が浮かんできて、いまごろどうしているだろうかと思ひ出すのです。この学生の面影は、恐らく私が死ぬ日まで消えないだろうと思っております。

人間は、つくべき縁があればともない、離るべき縁がくれば離れていくのです。そのなかで、一日中一緒にいながら、一瞬たりとも会っていないという人間関係もありますし、五十年別れていても、一日も離れていないという人間関係もあります。人との出会いのなかで、その時が生涯の思い出となるような出合いは、やはり一期一会の思いがこもっていないと恵まれてこないものです。漫然と日常生活を送るのではなく、一期一会の心を持つて過ごさなければ、このような出合いは求めても出てこないと思うのです。⁽²⁰⁾

真実心

学園の掲げる「真実心」を仰いでも、それは私に「堅持されるもの」として要請されているものではなく、「如来の真実心」を信受することによって、みずからの「虚偽の心」が知らされ、独善と偏執の破られていくことを領解されるのであります。したがって、真実心が自分にあると思うたり、他人に向って真実心を持って、声を強めるような思い上がりの破れていくところに、人間としての生き方のあることを教えて下さるものと、この

校訓をうけとつていきます。

〔学園報No.12〕掲載「学園長就任挨拶」より）

教育基本法第一条で「教育は人格の完成をめざし……」としているように、教育の本質的意味が人間形成にあることは異論はないと思うが、その人間形成は真実の宗教を俟って始めて可能であるというのが本学の基本である。

少し理屈っぽくいうと、ここで真実の宗教とは、親鸞によって顕彰された仏教を指し、それを「真実心」なる一句に約して教育の場に移したのが校訓である。従ってこの校訓の「真実心」は親鸞の領解を通して如来の心、仏心の意味にうけとめ、如来の大慈悲心にあれることを願うての呼びかけの言葉である。教育の場に移したということは、子どもたちの発達段階に応じて、たえず人間的な意味での真実心のみならずからに求めさせていくことがきわめて大切であること、及びそのことによつていつかは人間に絶対の真実心なきことを気付かしめ、かえって仏心に目覚めさせようとする配慮をいうのである」（傍点筆者）

〔光華広報No.1〕掲載「あるべきよう」

廣小路師の「真実心」領解は、これまで紹介してきた師の教育観と完全に一致するものであり、師自身が座右の銘的に尊重してきた澤柳政太郎師の「教育とは誠を行うことだ」という言葉とも、解釈上響き合うものがあると思われる。現在様々な意味で学園の「真実心」具体化も新しい局面を迎えようとしているが、総合学園という場を考えると、傍点に示した「発達段階による具体化の工夫」という一点が何よりも配慮されるべきであろう。

内なる危機

今日は私学の危機である、といわれています。なるほど経営的にみれば危ういものがある。また私学の教育そのものにも深く考えてみねばならないものもあります。しかし、この国での私学の存在は、いつの時にも経営上楽なことはなかったし、私学の教育そのものも、大きく手足をのばして独自のものを打ち出していけるような保証された環境ではなかったと思います。そういう意味では、現在の私たちが私学の危機に当面し苦しんでいるように思いつめるのは、甘えている証拠であり、先輩に対して恥ずかしいことだと思えます。

(中略)

私学の崩壊は外的条件によるというよりは、内なる精神の脆弱によるといべきでしょう。この精神の頹廢が私学の危機を招いていると言つてよい。⁽²⁾

廣小路師のこの文章は、昭和四十九年、大谷中高の創立一〇〇周年の際に述べられたものである。

それから約一〇年後の昭和六十年、真宗大谷派関係学校連合会二十周年記念式典における挨拶の中で、まさに廣小路師と同じ指摘をされたのが、当時の連合会会長でもあった、大谷大学学長廣瀬^{ひろせ}果^{みなも}師であった。

廣瀬師がその席上、「間もなく少子化の波が押し寄せ、我々大谷派関係学校も含め、私学はその運営上未曾有の危機に見舞われることになるであろうが、実はその対策に追われるなかで〈建学の精神〉が風化現象を起こすことがあれば、それこそが真の意味での危機である」と述べられていたことを、今ありありと思ひ出す。

廣小路師、廣瀬師共に学長あるいは校長として、学校運営の難しさは十分に知り尽くしておられた、その上での発言に盤石の重みを感じる。

しかし今、実際に私学危機が到来し、各校ともその存続を賭けた現実的な対応、施策に汲々としている現実がある。中には、「真宗大谷派関係学校であることを、経営戦略上打ち出さない方が得策である」あるいは「隠さなくてもよいが、宗教学校としてのカラーはできるだけ強くない方が運営上望ましい」との安易な判断を下している学校もあるようで、その意味では両師の懸念は不幸な形で中しているのかもしれない。

しかしながら、大谷派の関係学校として「親鸞聖人によって開顕せられた人間観に基づく教育活動を実践し、真の自覚的人間を生み出す」という建学の理念が達成できなければ、学校としての存在意義を世間に主張することは難しいのではないだろうか。改めてそのことを強く思う。

おわりに―前に生まれん者は後を導き、後に生まれん者は前を訪え―

本研究は廣小路亭先生の人格に対する讃仰、あるいはその教育業績の顕彰そのものを目的としたものではない。しかしながら、稀有の教育実践者であった師のお言葉をたどることによって、「真宗に依る教育」の本来的意義を明らかにすることを目的とし、併せて「宗教教育」理解および実践上の問題点を再考するために取り組んだものであった。

譬えて述べる事が許されるならば、師の「宗教教育」観とは、まさに「未来にお浄土にお生まれになる方々をお育て申し上げるのだ」という、謙虚且つ強固な信念に基づくものに他ならなかった。

つまり師の内面においては真宗の念仏者としての生き方と、教育者としての生き方が不可分のものであったと言えることができよう。まさにこの点において師は〈真宗教育者〉という表現で呼ぶにふさわしい存在であった。

そして、師の生き方を振り返るとき、自然と思い出されるのが、「教行信証」に現れる以下の聖句である。

「安樂集」に云わく、真言を採り集めて、往益を助修せしむ。何となれば、前に生まれん者は後を導き、後に生まれん者は前を訪え、連続無窮にして、願わくは休止せざらしめんと欲す。無辺の生死海を尽くさんがためのゆえなり、と。已上⁽²⁾

父母をはじめとする、有縁の方々を介していただいた仏恩に、次の世代を心こめて育ていくことで報いていこうとするその姿勢は、一貫して謙虚であり、真摯である。「前に生まれん者は後を導き、後に生まれん者は前を訪え」この言葉にこそ、まさにそうした廣小路師が求められた、教育者としての、念仏者としての、そして何より一家庭人としての原点があるように思う。

先生が逝かれてすでに二十数年、時代の変化も昔日の比ではない。

さすがに先生のお言葉からいただいた教えの中にも、今日そのままの形で現場に対応し得るものと、一定の配慮や工夫が要されるものとに区別する必要があるように思われる。

しかしながら、不易と流行の言葉通り、「時代の推移とともに変わらなければならないもの」と「時代が変わっても見失ってはならないもの」が存するのは事実であろう。

今回の研究はまだ端緒にすぎたばかりである。「ほんとうの宗教教育」実現に向けて、さらに師のお言葉を道標に拙い歩みを一歩ずつ続けていきたいと願うものである。

註

(1) 「学窓余言」推薦のことば」全文

- (2) 「加齢のこみちで」一〇二～一〇三頁
- (3) 「大谷」第七号一頁
- (4) 「燈花集」一八五～一八七頁
- (5) 同右一八八～一八九頁
- (6) 同右一八九～一九〇頁
- (7) 同右二〇八～二一四頁
- (8) 「加齢のこみちで」七〇～七三頁
- (9) 「同和教育についての表明」(昭和四十八年)
- (10) 「縁に随う」一七四～一七六頁
- (11) 「加齢のこみちで」一〇四～一〇六頁
- (12) 同右二〇九～二一〇頁
- (13) 「加齢のこみちで」二二八～二三〇頁
- (14) 「燈花集」九頁
- (15) 「加齢のこみちで」六一～六二頁
- (16) 「燈花集」一八一～一八二頁
- (17) 同右二四一～二四二頁
- (18) 同右二四九～二五二頁
- (19) 「縁に随う」五三～五六頁
- (20) 「建学の精神」と教育方針」七頁
- (21) 「大谷」第七号
- (22) 「真宗聖典」四〇一頁

主要参考文献

本稿の執筆にあたり、以下の書物を参考、引用させていただいたことを明記し、深謝するものである。

- 廣小路亨【学窓余言】(全人社・昭和三十八年)
- 廣小路亨【燈花集】(大谷中・高等学校・昭和五十二年)
- 廣小路亨【自位に住して】(廣小路亨先生喜寿を祝う会・昭和六十一年)
- 廣小路亨【加齢のこみちで】(廣小路亨先生喜寿記念出版会・昭和六十三年)
- 廣小路亨【縁に随う】(聞法寺・昭和六十三年)
- 廣小路亨・菊村紀彦・川瀬和敬(共著)【親鸞のひかり】(真宗大谷派宗務所出版部・昭和四十八年三月)
- 【大谷】第7号(大谷中・高等学校・昭和四十九年)
- 【研究紀要1964年度】(大谷中・高等学校・昭和三十九年)
- 【研究紀要1991年度】(大谷中・高等学校・平成三年)
- 福島和人【真宗教育者―廣小路亨先生を憶念して】(名古屋別院信道講座講義録No.140・平成二十年)
- 【親鸞像の再構築二】(大谷大学真宗総合研究所・平成二十一年)
- 【みのある教育を求めて―大谷中学校バタバ・システムの報告―】(大谷中学校・昭和三十九年)
- 司馬遼太郎【学窓余言】推薦のことば(全人社・昭和三十八年・帯封)(上記『燈花集』「あとがき」に再録)
- 真宗聖典編纂委員会【真宗聖典】(東本願寺・昭和五十三年)
- 学園運営部総務グループ【建学の精神】と教育方針(光華女子学園・平成二十年)